

イラク—狼の谷—

2007(平成19)年10月12日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督＝セルダル・アカル／製作＝ラージ・シャシュマズ／脚本＝ラージ・シャシュマズ、バハドウル・オズデネル／出演＝ネジャーティ・シャシュマズ／ビリー・ゼイン／ハッサン・マスード／ベルギュザル・コレル／ギュルカン・ウユグン／ケナン・チョパン／ゲイリー・ビジー／ヤウズ・イムセル／タイフン・エラスラン／イスメット・ヒュルミズル／ジハード・アブドウ／ディエゴ・セラーノ（アット エンタテインメント配給／2006年トルコ映画／122分）

……イラク北部を舞台としたトルコ映画だが、難しい論点は二次。あくまで反米感情に徹した冒険活劇アクション映画は、何と「トルコ歴代動員記録第1位!」を記録。逆に、アメリカでは鑑賞禁止だそうだが、強固な日米同盟を誇る日本では、観ても大丈夫……？

第4章

現実から目をそむけるな!

この映画は一体ナニ……？

この映画は一体ナニ……？ 試写の案内を見た時そう思ったのは当然で、これは私たち日本人がほとんど観たことのないトルコ映画。そんなトルコ映画が大阪で1週間だけながら上映されることになったのは、RCSの努力によるもの。

この映画のチラシやプレスシートには、「イスラム社会が熱狂した過激な反米アクション映画——ついに日本解禁!」とある。タイトルからみても、現実起こったイラク戦争を題材としているらしいが、そんな映画がホントに日本人の私たちに理解できるの……？

「トルコ歴代動員記録第1位!」に納得……

そんな心配をしていたが、映画を観ているうちに心配はふっとんだ。この映画は、イラク戦争の中で世界的に知られるようになった数々の事件を素材として使っているが、ドキュメンタリー映画ではない。むしろその逆で、実は元トルコ諜報員ポラット・アレムダル（ネジャーティ・シャシュマズ）を主人公とした冒険活劇。その相手

となるのは、CIA のためにイラク北部で秘密部隊を率いているアメリカの元軍人サム・ウィリアム・マーシャル（ビリー・ゼイン）。なぜイラク戦争の現場にクルド人ではなくトルコ人が……？ それは映画を観てのお楽しみだが、複雑な民族問題や軍事問題をあまり厳格に考えず、極悪非道なアメリカを元トルコ諜報員ポラットが「月光仮面」となってやっつける痛快活劇として楽しめばいい……？

2006年2月にトルコで封切られたこの反米アクション映画が瞬間に記録的な大ヒットとなり、国中を席卷したのはトルコ人の立場に立てば当然。そしてそう考えれば「トルコ歴代動員記録第1位！」「イスラム諸国を席卷、西欧社会で社会問題に。アメリカは鑑賞禁止！」「世界28カ国で公開され、大きな反響をまきおこした衝撃作」にも納得！

アメリカでは、この映画をどのように……？

アメリカは民主主義国だから、マイケル・ムーア監督の『華氏911』（04年）や『シッコ』（07年）のような痛烈なブッシュ大統領批判の映画でも「差別」されることなく国内で上映されている（？）が、どうも、これほど露骨な反米映画については別らしい……？

10月11日に行われた内藤大助 vs. 亀田大毅の WBA 世界フライ級タイトルマッチにおける大毅選手のみじめな負けっぷりと反則ぶりは、ついに亀田ファミリーに対する処分にまで発展した。また亀田ファミリーを英雄のように扱ってきた某テレビ局を中心とした一部マスコミに対する批判も盛りあがってきた。

世界の憲兵たるアメリカ合衆国は、この亀田大毅選手のようなカッコだけで中身の無い国ではないが、それでもトルコ映画がここまで露骨な反米攻撃をしてくると、どうも守りの姿勢に入っているようだ。その結果アメリカでは、「米軍は機関紙『星条旗（STARS & STRIPES）』において、ヨーロッパや中東在住の軍関係者に、映画を見ることが、映画が上映している劇場に近づくことも避けるよう警告を発した」とのこと。さらにこの映画に悪役のマーシャル役として登場したビリー・ゼインや臓器売買をしているその友人の医師を演じたゲイリー・ビジーに対しては、マスコミからすごい非難が浴びせられているらしい。もっとも、それ自体がいかに自由の国アメリカ、民主主義の国アメリカらしいのかもしれないが……。

イラク情勢はわかりにくいが……

9月26日の福田康夫内閣の発足を受けて、10月1日から国会での論戦が始まった。その焦点はインド洋での給油活動の是非つまり、「給油新法」をめぐる問題。日本の給油艦から給油を受けたアメリカの艦船がイラクに向かったのではないかという疑惑（問題提起）を含めて徹底的に議論を深めることは大いに意義のあること。また、小沢一郎民主党代表の、アフガニスタンでの国際治安支援部隊（ISAF）や、スーダンでの国連平和維持活動（PKO）など危険な活動も国連決議があれば参加できるという「国連中心主義」の是非についても、徹底的な議論が必要。

海外では、ミャンマーの軍事政権による宗教指導者たちがリードしたデモ行進に対する徹底的な弾圧はすごいものだった。また現在イランで拘束された横浜国立大学の中村聡志君の取り扱いをめぐって、これから大変な交渉が予想される。このように、日本列島は平和で、毎日バラエティー番組を見てアハハと笑っていられるが、アフガン戦争後のアフガニスタンやイラクそしてイランをめぐる世界の情勢は大変なものがある。しかし多くのアホバカ日本人はそんな問題に全く関心をもっていないのが現状。

そんな日本人であっても、この映画を観れば、①フード事件（2003年7月4日）、②結婚式虐殺事件（2004年5月19日）、③アブグレイブ刑務所事件（2004年4月）、④過激組織によるジャーナリスト殺害事件、⑤コンテナ輸送虐殺事件（2001年11月9日）、⑥臓器売買疑惑（2004年12月18日）など、新聞で大きく報道された事件を少しは思い出すはず。この映画がそれをどこまで正確に描いているかは別として、こんな現実の動きの中で、主人公ポラットが大活躍していることに注目したいもの……。

登場人物たちは……？

プレスシートには「イラク北部—4つの勢力—」という分類のもとに、登場人物を整理してくれているので、日本人の私たちにはこれが便利。

まず「トルコ人」のグループは、ポラットとその忠実な部下メナティ（ギュルカン・ウユゲン）とアブデュレー（ケナン・チョバン）。もっともアブデュレーはクルド系トルコ人とのこと。

次に、サムから目の敵とされ徹底的にその所在を追及されているポラットと秘かに連絡をとっているのが、トルコ人代表のハサン（ヤウズ・イムセル）。そしてこのト

ルコ人代表のハサンと同じような、「アラブ人」の代表がアブ・タリク師（イスメット・ヒュルミュズル）で「クルド人」を代表するのがクルド人指導者（ジハード・アブドゥ）。サムはこの3人の代表と必要に応じて会談をもち、イラク北部の統治について話し合っている様子……。

他方、宗教的理解に富み、あらゆる人種や文化を保護してきたため、その地域のクルド人・アラブ人・トルコ人に民族を超えて慕われているのが、アラブ人のケルクーキ導師（ハッサン・マスード）。そしてこの映画の紅一点として登場し、男顔負けの大活躍をするのが、幼い頃に両親を亡くし、ケルクーキ導師の下で育ったレイラ（ベルギュザル・コレル）。彼女は結婚式の夜に愛する夫を殺されたため、その襲撃を命じたサムに対して復讐を誓うことに……。

「アメリカ側」の登場人物として、サムの友人であるユダヤ系アメリカ人医師が登場するが、彼は臓器売買をやっている悪徳医師……？ また、サムの忠実な部下として悪行の限りを尽くすアメリカ軍人がダンテ（ディエゴ・セラーノ）。

前記①～⑥の事件を頭におきながら、こんな登場人物のキャラを理解すれば、この映画の楽しみ方はバッチリ……。

抗争の発端は……？

この映画の冒頭、前記①のフード事件が描かれる。これは2003年7月4日に実際に起きた事件で、イラク北部スレイマニエに駐留していたトルコ特殊部隊の秘密本部が突然ウィリアム・C・メイビル大佐率いるアメリカ軍第173空挺部隊によって踏み込まれ、11人の兵士たちは頭にフードをかぶらされた状態で連行され、60時間もの間抑留され続けた、というもの。この映画ではそれを命じるのはもちろんサムだが、戦うことも許されず犯罪者のように扱われた誇り高きトルコ将兵であるスレイマン（タイフン・エラスラン）は、屈辱に耐えられず一通の手紙を友人のボラットに送り自殺することに……。トルコ人のボラットは、部下のメナティ、アブデュレーと共に友人の無念を晴らし、サムと対決すべくイラクへ……。

第1ラウンドは……？

ボラットら3人は、西側の政府関係者が集うハリルトン・ホテルのレストランに乗り込んだ。そこでボラットが支配人のフェンダーに要求したのは、電話でサムを呼び

出すこと。もちろんフェンダーはそんな要求に応じるつもりはないが、ポラットが手に持つのはホテルの柱に仕掛けた爆弾の起爆装置。そこでやむなくフェンダーはサムを呼び出し、ポラットたちはテーブルを挟んでサムと対峙したが、そこでポラットが要求したことは一体ナニ……？

それは私の予想を超える意外なものだったから、皆さんにも是非それを考えてもらいたいもの。また当然サムの背後には武装したアメリカ兵がいっぱいだから、万一起爆装置が一瞬でもポラットの手を離れたら、たちまち3人のテロリストたちの身体はハチの巣になるはず。さあそんな第1ラウンドの攻防戦は……？

ポラットも元諜報員としてよく考えた舞台設定をしたのだが、百戦錬磨のサムはそれ以上の頭脳作戦を展開していくところが第1ラウンドの見モノ……？

第2ラウンドは……？

ポラットは私の予想をはるかに超えるそんな要求をせず、単純にスレイマンの復讐のためにサムを暗殺すればいいと思うのだが、それでは活劇映画にならないから面白くない……？ しかし、これほど大胆に顔を見せてしまえば、その後の作戦が難しくなるのは当然。そこで以降はただひたすらサムの暗殺に目的を絞ったようだが、ここでも私は、それならなぜ最初から、とつい思ってしまったもの。

私に言わせれば、要人の暗殺だけならプロの技術をもってすれば比較的容易。現に第2ラウンドでは、厳重な警戒下でもそのチャンスがめぐってきた。ところが、この第2ラウンドでもとんだハプニングが……？ このように予想外のシーンを入れこむことが映画を面白くさせるコツだから、その醍醐味はあなた自身の目で……。

第3ラウンドは……？

危機の迫っていたポラットたちを助けたのはレイラだが、ここらあたりのつくり方はかなり雑で、ポラットたちを追い詰めようとするサム配下の兵隊たちがみんなバカに見えてくる。そんなバカな兵隊たちをまんまと出し抜いたポラットたちは再度腰を落ち着けて、サムの暗殺計画を練った。その方法は、爆弾のプロらしく、サムにプレゼントされる白いピアノの運搬中、その中に爆弾を仕掛けようというもの。一体どんな仕掛けになるのか私にはよくわからないが、ポラットたちの計画はまんまと大成功！ サムの部屋は大爆発を起こして、ピアノもろとも吹っとんだから、これにて

ジ・エンドと思ったが……。

最後の戦いは……？

この手の映画では悪人は簡単に死なないのがふつう……？ 九死に一生を得たサムは再度徹底したポラットの搜索網を敷くとともに、ケルクーキ導師の暗殺を計画した。そんな中、遂にサムとポラットたちの最後の戦いが……。この最終ラウンドでの知能戦は、サム死亡と思わせ、ポラットたちの油断を誘ったサムの勝ちだったが、実際の戦いでは、さて……。

サムの兵士たちには凶暴なダンテをはじめ腕利きがたくさんいるのだが、なぜかポラットとメナティ、アブデュレーの弾はよく当たるのに対して、サムの兵士たちの弾は外れが多い。またメナティもアブデュレーも敵の弾を受けているし、ポラットもサムからの弾が当たっているのだが、文字どおり一騎当千の働きによって、遂に最後はポラットとサムの2人の決戦が実現することに。他方、これを機会にサムの心臓に一太刀をと狙うレイラは、逆にサムの返り討ちにあう悲劇に……。しかして最後の決戦は……？

これで満足なら、ポラットは最初からサム1人だけの暗殺を狙えばよかったのに、と思う面はあるものの、反米感情の強いトルコの人たちはこの結果に大喜び……？

2007(平成19)年10月18日記